

清朝のお宝から考える

松浦 純子

先日、テレビで「清朝秘宝 百年の流転 白熱オークション」という番組を見た。新聞でタイトルを見た時から内容は大方想像がついていた。世界に散らばった清朝の秘宝を中国人が買い戻すというだけの話だが、桁が違いすぎる。日本で百万円の値が付いたものが、中国では百倍や千倍でも落札する人がいる。番組の最後で、「この秘宝をあなたはどうするつもりですか」と聞かれた落札者は、「また売りに出します」との返事。理由はできるだけ多くの人が見られるようにということだったが、本心でないのは明らか。「また一儲けしますよ」がその人の笑顔から感じられた。富裕層は有り余るお金をどう使おうか迷っているらしい。

そもそもなぜ、清朝の秘宝が海外に売りに出されたのかと言えば、清朝末期から中華民国の時代に起きた事件が原因である。「八か国軍と戦って敗れた義和團事件での混乱」、「二千年の皇帝政治が倒された辛亥革命での混乱」、「清朝復活をもくろむ恭親王溥偉による資金調達で売却」、「溥儀が生活に困って売却」、「日中戦争での混乱」などである。恭親王溥偉とは清朝第九代皇帝咸豊帝の弟の恭親王奕訢の孫である。「溥儀」と「溥偉」の名前から分かるように二人とも咸豊帝の孫の代に当たる。

紫禁城の周りには皇族の住居である王府がある。紫禁城に無数の秘宝があるのは当然だが、恭親王の住居である恭王府にも数えきれないくらいの秘宝があったという。彼が売りに出した宝を購入したのが日本人の山中定次郎という京都の古美術商。溥偉から声がかかり、中国に赴いて借金をし、一世一代の賭けで、清朝の古美術を大量に購入したということだ。彼の会社はアメリカやイギリスに支店を出し、まさにグローバル企業であった。

この番組を見て感じたのは、中国の富裕層の異常なまでの資金力だ。習近平は「共同富裕」を掲げているが、経済格差が是正されることは難しいと思う。それより鄧小平が推し進めた「先富論」がまだ続いている気がした。